59

ゲーテと医療（第 4 報）
――とくに彼の作品に描かれた医学的諸問題――

鈴木　重統
北海道大学

はじめに

ゲーテは「誌と真実」のなかで，医学はあらゆる科学部門のなかで人間の実生活と直結しており，医学が全人間の関心事となるのはそれが全人間とかかわるからであると記述しているが，事実ゲーテ自身もその出生の時点で重症仮死から救命されるという事態に遭遇している．それゆえか彼は法科の学生でありながらライプチヒでもストラスブルグでも医学部の講義にも出席し，のちに顎間骨を発見しイエーナ大学から名誉博士の称号まで授与された．

今回は彼の作品のなかで「ウイルヘルムマイスターの修業時代」「ファウスト」のなかからとくに医学に関係のある部分を選び考察を加えたい．ファウストの中には，フーフェランドの「長寿法」を引用したくだりが見られている．

ウイルヘルムマイスターとその修業時代

主人公は外科医になる．戯曲「扇動された人々」において「外科医はお前の役にたつし，だれの害にもならぬ」（第一幕第四場）ゲーテは別名マイスターとも呼ばれ魂の医者ともされた．人間において心身は分離できないため，「外科医は心眼でみなければならない」というのがゲーテの持論であった．

「生きることを思え」は「ウイルヘルムマイスターの修業時代」のモットーであり，事実ゲーテを尊敬してやまないシュヴァイツアーの人生は「修業時代」そのものを垣間見ることもできるが，その思いとは裏腹に女優のアウレーリエ，竪琴弾きの老人，半陰陽のミニヨンなどが死んでゆく．

ファウスト

①「魔女の厨」でメフィストフェーレスはファウストに告げる．ファウストはメフィストフェーレスに，自然で「高潔な精神」によって見つけられる延命と若返りの方法について尋ねる．その回答：「そりゃあなたを若返らせるには自然の療法だってありますさ．けれどもそれはまた別の本に書いてあることで，奇妙な一章をなしていますよ」

この「ファウスト」と「メフィストーフェレス」の会話における語と文，概念の対比から証明できるのは，かの「別の本」がまさしくフーフェラントの著作「長寿法」であり，かの「奇妙な一章」は作り事ではなく，その中の特定な一章だということである．そしてその一章とは，フーフェラントの「長寿法」II 実践編の第二節「延命する方法」の第 4 章「耕地と庭のある生活」なのである．

②メフィスト「類似療法」Homöopathie を諷刺して，足が霜焼けという褐色の髪の女性を馬のひずめのような悪魔の足で踏みつける．「毒は毒をもって制する」，当時同様のいかがわしい療法が，たとえばメスメリスムス（動物磁気催眠術）のように蔓延していたのである．

フーフェラントがゲーテの作品に与えた影響

一生涯，医学にも大きな興味を抱いていたゲーテ―彼は後にイエナ大学医学部から名誉博士の称号をもらっている―が，彼の侍医である C.W. フーフェラントと，当時の医学の急速な展望と根本方針の転換について多くの議論をしたことは類推される．「ファウスト II」を製作していた老人ゲーテが徐々に進行するフーフェラントの失明に留意していた頃「ファウスト」は自然に失明する．ゲーテはフーフェラントとの相互作用によって，言い換えるとフーフェラントは人間として，博愛主義者として，ヒポクラテスの誓いに忠実な医師としてゲーテの作品に貢献することができたのではないかと思われる．